

最新世界史図説 タペストリー

二十三訂版

「ヒストリーシアター」コーナー
教師用解答・解説

〔各設問の分類〕

- 見** このマークがつくものは、授業時にヒストリーシアター内の写真を観察・読み解くことで、答えがわかるものです。資料活用問題の訓練や、授業のアクセントなどにお使いいただけます。
- 考** このマークがつくものは、ヒストリーシアターにある写真などの情報から、推理を行うことで答えにたどり着くものです。授業で歴史的概念や用語、時代・事件の底流を把握させるときなどにお使いいただけます。
- 調** このマークがつくものは、ヒストリーシアター外の年表・図版、教科書などから、高校世界史レベルの調査をすることで、答えにたどり着くものです。宿題・レポートなど、授業後の復習・発展課題・考査時にお使いいただけます。

※これらの設問は、「観点別評価」（「関心・意欲・態度」「思考・判断・表現」「技能」「知識・理解」の4観点があります）の際にも、4観点のチェックに先生方のお考えに応じてご活用いただけます。

〔解説中のページ番号について〕

この冊子の解説に示されるページ番号は、本体の方のページをさしています。

帝国書院

P.55 メソポタミア諸国家 【「目には目を、歯には歯を」】

解答考 訳文が「目には目を」を示しており、同害復讐の原則が読み取れる。また法典碑頭部に両者が並んでポーズをとっているが、玉座に腰かける太陽神シャマシュが、ハンムラビを「王」に任命し、同時に神の掟である法をこの王のみが実行できるよう授けていることが読み取れる。

解説 この法典は、1901年スサにおいてモルガンを長とするフランスの探検隊によって発見され、世界最古の法典ではないが古代オリエント史解明の重要な史料として大きな歴史的価値を有している。シャマシュは正義をつかさどる太陽神で、王権の象徴である杖と腕輪をハンムラビに与えようとし、ハンムラビもこれに対し右手をあげ恭順の意を示しながら、受諾していることがわかる。「メソポタミアは法の歴史」といわれ、王が神であるエジプトには法は存在しないが、シュメール人の都市国家時代からメソポタミアでは、神の命を受けた者のみ、法の支配を実現できるという伝統がある。この法典はシュメール以来の法を集大成し全282条からなり、アッカド語の楔形文字で記され、刑法や婚姻法、相続法、商法、家族法など内容は多岐にわたっている。また同害復讐で有名な刑法は、その適用に明確な身分差があることもよく知られている。

P.56 エジプト統一王国と東地中海世界 【王(ファラオ)は神の化身】

解答考 ピラミッドのような建造物をつくりあげるには、基礎となる単位や知識・技術が必要であったが、単位については、人の腕の長さを基本としたキュービットを用いた。資材の調達、労働者の動員、作業の組織化、単位の設定を行うことができたのは、王の権威があったからであった。

解説 「大きな家(ペル・アア)」を意味するファラオは、太陽神ラーの子として地上を支配した。ファラオが死ぬとオシリス神となって復活し、冥界に君臨すると信じられた。図⑤「死者の書」では、オシリス神が作物などにつながる緑色で描かれている。また、ピラミッド建設は、農閑期の人々へ仕事を提供するという公共事業的な色彩を帯びていたとされる。この建設に、腕を曲げたときに肘の先端から中指の先端までの長さを使ったキュービットという単位が使われた(図④)。この単位は、メソポタミア・エジプト・ギリシア・ローマで広く使われたが、各地域・時代によりその単位の長さは異なる。エジプトでは数種類のキュービットが使われ、同じ時代に524mmと463mmの2つのキュービットの長さがあった。ニュートンは、長い方のキュービットは王の肘からとられておもにピラミッドの内まわりに使われ、短い方は一般の人の肘からとられておもに外まわりに使われたと考えた。しかし、両者の関係は、短い方を ℓ 、長い方を L とするならば、

$$\frac{\ell}{L} = \frac{463}{524} \div 0.884 \div \frac{\sqrt{\pi}}{2}, \text{したがって } \ell^2 = \left(\frac{\sqrt{\pi}}{2}\right)^2 L^2 = \pi \left(\frac{L}{2}\right)^2$$

となる。これは短い ℓ を一边にとった正方形の面積と同じ面積の円の直径が L であることを示す。また、土地用ものさしとして、1キュービット=741mmも使われていた。これは、524mmを2辺とする直角二等辺三角形の底辺の長さとはほぼ等しい。このような数字関係からエジプトの技術水準の高さを生徒に理解させることもできる。

P.58 ヘブライ人とユダヤ人 【「私のほかに、何者をも神としてはならない」】

解答考 ヘブライ人の戒律の最も基本となるのは神がモーセを通してヘブライ人に授けた『十戒』であり、神との関係からみた特色は彼らの神を唯一と定めたことと、信仰のための偶像を一切否定していることなどである。

解説 オリエントの社会ではあらゆる自然物や自然現象を神格化する自然崇拝の多神教が発達する。その中で、唯一最高神ヤハウェの一神教を守り通し、ユダヤ教を確立したのがヘブライ人である。エジプトで一時アテン神信仰があったものの、ヘブライ人の一神教がイエスの登場で世界宗教(キリスト教)に発展したり、さらにイスラームにも影響を与えたりしたことを考慮すれば、ユダヤ教の存在意義は計り知れない。ヘブライ人は数々の民族的受難を経験したといわれる。図①②にある「出エジプト」やモーセについて、理解を助ける補助教材として、アメリカ映画「十戒」(1956年)の鑑賞を生徒にすすめたい。なお「十戒」の内容について、①～④は神への宗教的義務、⑤～⑩は人間としての道徳的義務を示している。

発問例1 ユダヤ教成立に至るまでの代表的なヘブライ人の民族的受難を調べてみよう。

解答調&解説 「出エジプト」や新バビロニアによる「バビロン捕囚」がある。最大の受難「バビロン捕囚」は祖国喪失という悲劇を招き、奴隸的使役に苦しんだが、ヘブライ人はこれらの受難を唯一神ヤハウェが課した試練と考え、メシア(救世主)をひたすら待望した。

P.60 オリエント世界の統一 【王の中の王】

解答見 図②はバクトリアの使節。下の①の地図でバクトリアの位置を確認すると、現在のアフガニスタン北部に相当する。ペルセポリスまで直線距離にして1500km程度であることから、アケメネス朝の広大な領土を実感できる。

解説 オリエント世界の統一は、先にアッシリアにより実現されたが、その規模や期間そして支配体制においてアケメネス朝ペルシアとは比較にならない。帝国の支配下に入った民族も多岐にわたり、ペルシア王への朝貢使節は23の民族に及んだという。まさにペルシア王は「王の中の王」といえる。アケメネス朝は、このような被征服異民族の統治にあたり、アッシリアのような強圧政策をとらず、彼らの法・言語・慣習そして宗教を尊重する寛容主義でのぞんだ。このことは、帝国支配を円滑に運営できた大きな要因となった。なおさまざまな民族衣装を身にまとい、めずらしい動物や特産品を献上する、この浮き彫りに描かれた使節は、当時の風俗を知る重要な資料でもある。

P.61 パルティア王国とササン朝ペルシア 【奈良に残るイラン文化】

解答見 弓の形態、馬の足、帝王の顔、帝王のパルティアン=ショットなどが類似点としてあげられる。

解説 ササン朝ペルシアでは国際色豊かな高度な文明が発達したが、その代表が美術工芸分野である。図①②を比較検討させれば日本との関係を導くことができる。はるか昔のペルシアの国など日本とは無縁と生徒は思いがちだが、その文化がはるばる「オアシスの道」の東の終点である日本にまで伝播していることを理解させたい。このほかにも正倉院宝物には白瑠璃碗、漆胡瓶、八曲長坏などペルシア風の器物がいくつかみられる。パルティアやササン朝は、東ばかりでなく西のビザンツ帝国やヨーロッパ中央部までその高い芸術が影響を与えたことを忘れてはならない。

なお、「パルティアン=ショット」の図像の中で、帝王が狩猟することは、戦闘の訓練やスポーツなどの実用的な側面のみならず、帝王自らが作物や家畜に害をなす動物を殺すことで、作物や家畜の増加を保証するという儀礼的な面も合わせもっている。

P.63 古代地中海文明の生成 【母なる海から生まれた文明】

解答見 図②には、たこが描かれている。図①のイルカや魚が海中で自由に泳いでいる姿からも、クレタ文明がオリエントとは異なる海洋文明であることがわかる。壺絵や壁画の色彩はあざやかで自由な筆致で描かれており、明るくのびのびとして、写実的かつ躍動感のある表現になっている。クレタやギリシアの人々はエーゲ海や地中海のさまざまな海の恵みを楽しみ、また貿易や植民活動などを活発に行って独自の歴史的地中海世界を構築していく。

解説 小アジアとギリシア本土の間にはさまれた内海のエーゲ海は多島海ともよばれ、多くの島々が散在し、複雑な海岸線が多く、良港にも恵まれていた。ギリシア本土の土地はやせて雨が少なく、山がちな地形で平地は限られている。したがって穀物の自給が容易ではなく、不足しがちの穀物を特産物のオリーブ油やワインと交換する交易活動が早くから発達した。また植民活動や移住も、厳しい自然を生き抜く手段として広く行われてきた。海岸沿いに都市が形成され、諸都市を結ぶ海上交通路が発達し、広範囲な交易・植民活動は各地の相互文化の交流を生み出していった。それはやがて地中海を中心に「ギリシア・ローマ世界」という、一つのまとまった西洋古代文化(「古典古代時代」)を生み出すことになっていく。

P.64 ギリシア都市国家 【アテネ民主政の主役たち】

解答見 図①の重装歩兵は兜・すねあて・槍・盾の武具を身につけ、経済的に武具を自弁できる平民(有産市民)で構成される。図②③の船のこぎ手は、武具は不要で、平民で最も貧しい人々である無産市民が活躍していた。

解説 アテネ民主政の発展をとらえる場合に大切なことは、ポリスは原則として戦士共同体であり、戦士である者に参政権があるということである。貴族に対してなぜ平民が参政権を要求できたのかを図①から、そしてペルシア戦争を経て、なぜアテネ民主政が徹底化しペリクレス時代にその完成を迎えたのかを、図②③より生徒に考えさせたい。「戦争が民主政を育てた」としばしば言われるが、戦術上の変化と活躍した階層をここから読み解かせたい。

発問例 1 重装歩兵や三段櫂船を使用した戦術とはどのようなものだったか、調べてみよう。

解答調 & 解説 重装歩兵戦法ともいわれ、円盾は左胸を覆えるが右胸は敵にさらされたので、右隣りの戦士の盾で覆ってもらふ必要から、密集隊形が形成された。この密集隊は堅固で幅広く展開する戦車隊のような破壊力を持ち、隊員相互の平等性と連帯性が必要になってくる。三段櫂船は波の静かな地中海に適した軍船で、こぎ手の力漕によって敵船の横腹に衝角を激突させ、武装兵が敵船に乗り込み敵を倒す接近戦法だったので、こぎ手の優劣が勝敗を大きく左右した。ペルシア戦争のサラミス海戦ではテミストクレスが無産市民をこぎ手に組織し、この戦術が功を奏しギリシアを勝利に導いた。

発問例 2 p.65図⑩⑪のパルテノン神殿の建っている場所はどのようなところか。また神殿内部には何がまつてあるのだろう。

解答見 アクロポリスに建っており、守護神である女神アテナをまつてある。

解説 信仰心の厚いギリシア人はポリス建設の際、共通の神を守護神として神殿にまつ場合が多く、防衛上の理由からでもアクロポリス(「高い城」の意味)に建てられた。したがってアクロポリスは神をまつる聖地であり、そこでは宗教的儀式がとり行われた。なおアテナ像は現在失われて残っていない。

P.66 ヘレニズム時代 【ギリシアとオリエントの覇者、激突す】

解答考 アレクサンドロス。

解説 図①では、先陣をきって突撃するアレクサンドロスがダレイオス3世に迫り、戦車上のダレイオスは倒れた部下に悲痛な表情で手をさしのべている。また、戦車の御者が、早く脱出しようと馬に鞭を当てる姿も描かれている。生徒のアレクサンドロスへの関心が高いことから、彼のエピソードとともに、遠征の経緯・経路、彼の死後の分裂について地図(p.6~7, 本頁⑦)を利用して説明したい。アレクサンドロスの東征は、オリエントに君臨したアケメネス朝ペルシアを倒すとともに各地にギリシア風の文化を伝播させ、現地の文化と融合したヘレニズム文化を生み出した。ギリシア文化の東伝については、ギリシア彫刻とインドの仏教とが結合したガンダーラ美術(p.10, 80~81を参照)を紹介する。

発問例 1 ダレイオス3世を破った後で、アレクサンドロスは其の娘と結婚し、部下のギリシア人将兵にもペルシア人女性との婚姻をすすめている。その理由を考えよう。

解答考 & 解説 東西文化の融合を進めようとしたため。イッソスの戦いに完敗したダレイオス3世は妃や王女を残したまま遁走した。大王はその王女の一人と結婚し、部下のギリシア人将兵とペルシア人女性との集団結婚式を実施したという。これは彼がいかに東西融合